

「できる」を見つけるキャリア支援

Career support make the individual “DEKIRU”

吉尾玲美, 高山仁志, 中鹿直樹, 朝野 浩

Yoshio Reimi

立命館学生ジョブコーチ

Ritsumeikan Student Job Coach

Key words: positive reinforcement, career support, behavior analysis

目的

学生ジョブコーチ(以下、SJC)は、特別支援学校などと連携し、大学教員の指導のもと、学生が中心となり障害のある個人のキャリア支援に関する実践・研究を行っている。SJCは、対象となる個人の実習場面における直接支援だけでなく、そこで発見された行動成立に必要な援助設定(環境設定)を含む「できる」の情報を、当事者の関係者に対して移行し、当事者の日常環境において行動成立に必要な援助設定を持ち出す。これらの作業の目的は、障害のある個人の正の強化で維持される行動の選択肢の維持・拡大(望月, 2001)することである。

本研究の目的は、当事者自身の「できる」に関する言語行動を引き出すための援助設定を検討することである。本研究では、SJCは仕事場面において当事者の仕事に関する多様な行動を強化し、それらの仕事場面での出来事を弁別刺激とした「できる」に関する当事者の言語行動を引き出すための援助設定(環境設定)を取り入れたアクティブ・シミュレーション(望月他, 1998)な場としての職場実習を実施した。

事例

対象者 研究期間初日に初めてカフェ業務を経験した特別支援学校高等部1年の生徒Aであった。

期間 2016年X月Y日～Y+4日の連続する計5日間。

場面 特別支援学校が管理運営しているカフェに、SJC(筆者)が参加した。業務内容は、(1)開店作業、(2)厨房業務(軽食物の簡単な調理)、(3)接客業務(来店時の案内、注文受け、商品の提供、レジスター)、(4)閉店作業であった。期間中は対象生徒を含む2～6名の生徒が(2)と(3)の業務を日によって交代で担った。教員は生徒全員の指示・指導を行い、SJCは生徒Aおよび生徒Aの同級生である生徒Bのみに支援を行った。

方法 SJCは、喫茶店の接客・厨房の業務の手順書をもとに作成した課題分析表に従って行動記録を取った。また、SJCは手順書には記されていない業務に関連する適切な行動が生起したときには、行動の機能についての説明を交えて言語的に強化するとともに、即時的に「できたカード」を生徒に渡した。また、毎回の実習後の振り

返りでは、その日の生徒自身の「できたこと」について口頭での報告を求め、SJCが記録した。

実験デザイン 生徒Aには5日間を通して「できたカード」を渡した。また、生徒Aの同級生として喫茶店の実習に参加した生徒Bに対しても、実習3日目～5日目に「できたカード」を渡した。

実習結果 SJCが生徒に対し「できたカード」を渡すタイミングは、生徒が「手順書に記されていない仕事に関する行動を生起したとき」としていたが、実際の実習では、仕事場面で生徒の側から「できたカードを下さい」という要求言語行動が見られたため、自分の行動について生徒に報告させた上で「できたカード」を渡した。

また、実習3日目以降に生徒Bに対して、生徒Aと同様の介入を行ったところ、生徒A・Bが双方に、自分ではないもう一方の生徒の行動について賞賛し、「できたカード」を渡すようSJCに対して要求する発言が見られた。

考察

本実践において、対象となった生徒にとっては、「できたカード」を受け取ることが、手順書に記されていないものの、その職場や支援者が期待する「適切な」行動について知る手がかりとなったと考えられる。また、自分自身だけでなく、同僚である生徒の「できる」を報告することで正の強化を受ける機会を設定したことで、自己と他者の両方を尊重しながら働く環境設定のシミュレーションとなったといえる。

今後は、生徒同士だけでなく、支援者が当事者の「できる」を発見する随伴性についても検討していく必要があるだろう。

参考文献

望月 昭・野崎和子(1998). 学習したことばを、どう般化させるか 実践障害児教育, 304, 50-53.

望月 昭(2001). 行動的 QOL: 「行動的健康」へのプロアクティブな援助 行動医学研究, 7, 8-17.